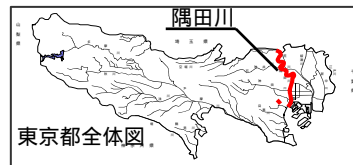


隅田川はどんな川？

隅田川は、北区にある岩淵水門で荒川から分派した後、埼玉県を流域とする新河岸川を合流させ、東京の東部低地帯の沿川7区（北区、足立区、荒川区、墨田区、台東区、中央区、江東区）を南北に流下し、東京湾へ注ぐ荒川水系の一級河川です。東京都が管理する区間は、隅田川本川、中流部で合流する旧綾瀬川、河口部の月島川および隅田川派川です。

流路延長は隅田川が23.5km、旧綾瀬川が0.43km、月島川が0.53km、隅田川派川が0.9kmです。流域面積は上流部の新河岸川をあわせて690.3km²です。

隅田川の東京都内関係7区の流域人口を合わせると約80万人であり、流域全体では約300万人に達します。



隅田川の名称の変化

隅田川はもともと荒川の下流にあたり、江戸時代のころには浅草近辺は「浅草川」、「隅田川」、上流は「荒川」、「宮古川」と呼ばれていた。明治43年の水害を契機に荒川放水路が作られ、その後、昭和40年に放水路の方を荒川、岩淵の水門から下流東京湾までの区間を正式に隅田川という名称とした。

隅田川的环境と利用

戦後の高度経済成長時代、工場や家庭からの有害な排水の増加は水質を悪化させ、また、高潮から市民を守るために行われた防潮堤等の治水工事により、人々は水辺から遠ざけられてきました。

高度経済成長期には、「生き物は生息できない」と言われ、悪臭の為に市民から川に近寄るのも敬遠されるほど汚染されていましたが、その後の下水道整備や河道の浚渫などにより、近年ではかなり水質が改善されてきています。

また、スーパー堤防やテラス整備等により水辺に近づける整備が進んでいるとともに、生き物の生息に配慮した整備も進みつつあります。さらに、水上バスや屋形船の運航、レガッタ等のボート競技や隅田川花火大会の復活など、水辺を活かしたレクリエーションの場としても活発に利用されています。



東京都はこれからの隅田川流域の川づくりを「地域と連携し、賑わいと親しみのある隅田川」をテーマとして以下のように行っています。

計画対象区間と期間

本河川整備計画区間は、隅田川本川とその支川及び派川（旧綾瀬川、月島川、隅田川派川）を対象とします。計画対象期間は、概ね30年間としますが、河川をとりまく状況の変化や社会をとりまく状況の変化に応じて見直しを行います。

治水の整備

隅田川本川および隅田川派川、旧綾瀬川は全川潮位変動がある河川であり、高潮から地域を守る必要があります。高潮に対しては、昭和34年の伊勢湾台風と同規模の台風により発生する高潮（A.P.+5.1メートル）に対して、安全であることとします。

また、洪水から沿川住民の生活を守るため、1時間50ミリ規模の降雨によって生じる支川の洪水を安全に流すことを目標とします。

大地震時の防潮堤損壊等による水害を防ぐため、テラス整備（根固め）及びスーパー堤防や緩傾斜型堤防を整備していきます。

水面の利用と河川環境の整備

多様な船舶が安全に航行できるようにするとともに、震災等災害時に備えた防災船着場の整備と平常時の活用を進めます。また、必要に応じ、船舶の係留施設について適正化を図ります。

水辺とふれあえる空間の確保や親水性の向上を図るため、スーパー堤防や緩傾斜型堤防、テラスの整備を行っています。その際、まちづくりと連携した河川整備を進め、川に近づきやすく散策が楽しめるよう親しみやすい川づくりに努めます。また、生き物の生息環境に配慮した川づくり、水と緑のネットワークづくりなどを進めています。



防災船着場の整備（明石地区）



スーパー堤防の整備（大川端地区）



生き物に配慮した整備のイメージ



沿川市街地との一体的な整備のイメージ